
Fate/Second

シバケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / S e c o n d

【Nコード】

N 8 4 2 3 X

【作者名】

シバケン

【あらすじ】

第二次聖杯戦争の血塗られた歴史を描く。7人のマスターと7人の英霊たちが織りなす物語。語り継がれることもはばかられる血濡れた物語。詳細不明の謎が今明かされる！非公式！

がらんどうを埋める何かに慎二郎は出会えるのか。

遠坂の悲願根源へと至ることが朱音には出来るのか。

至高の才能をクロウリーはどう使うのか。

うるわしの麗人ソフィアは誇りを貫けるのか。

ヘブンズフィールにユーリハイトは届くのか。

間桐の至宝慎一郎の目的は。

戯れでロード・バルトメロイは聖杯を手にするのか。

勝者なき戦いここに開幕。

Fate/Second (前書き)

今作は詳細不明の第二次聖杯戦争にスポットを当てています。正直にわか型月好きなのでめちやくちなこともあるでしょうが精一杯やっけていききたいと思います。ぼくはわかめが大好きです。

Fate / Second

これは第五次聖杯戦争の120年ほど前の聖杯戦争、つまり第二次聖杯戦争の記録である。

生存者は公式には誰一人としてなく、聖杯戦争にルールを設定するきっかけとなった血塗られた戦争、これが第二次聖杯戦争である。語り継ぐものも居らず、ただ歴史に埋もれていくだけの戦いであろうが、私はあえてこの救いのない過去を掘り下げていきたいと思う。これは私にしかできぬ仕事であろう。この経緯をまとめることこそ我が生涯最後の仕事になるだろう。

さあ共に参ろう。血塗られた戦争の中に生きた者たちのお話に。

明治時代初頭、大政奉還が為されて十数年、日本は爆発的に成長していた。鎖国が解かれ、多くの西欧文化が流入してくることによって庶民の生活も大きく様変わりし始める。もちろん地方では江戸時代とさして変わらぬ生活を送っているものがほとんどであったが、そしてその波はここ冬木の地にも押し寄せていた。というのも冬木の地を実質治めている遠坂家が西欧文化をいち早く取り入れ、相應の出資をしたのが要因であった。

なおこの出資には不明な点多くあり、私個人の考えから言わせると例えば魔術協会も大いにかかわっているのではないかと邪推する。額が額なので遠坂、間桐を足しても到底出資金には及ばないのだ。

なぜこれほどまでの巨額の資金が冬木という一地域に集まったのか。それについては考察するまでもない。

この冬木の地こそ60年に一度聖杯が現れるからである。

この聖杯はとうの昔に贋作認定されているのだが、いかんせん強力すぎた。つまり聖杯の真贋を問われれば贋作と断言できるのだが、肝心の願望機としての機能は確かに備わっており、機能的には本物と変わらないのである。

それゆえにここ冬木の地では前回の聖杯戦争同様、各地から令呪を刻まれた魔術師たちが集うのである。見方を変えれば聖杯戦争の環境を整えるためにどこかが出資したとも考えられる。推論ではないが。

聖杯戦争に参加する魔術師、もといマスターは7人である。

御三家たるアインツベルン、遠坂、間桐から一人ずつ、他から4人が慣例である。といってもまだ一度しか開かれておらず、ルールも明確に定まっではいなかったが。

また聖杯戦争を行うに当たって重要なことはマスターが令呪を刻まれていることのほかにサーヴァントを召喚して契約せねばならない。サーヴァントにも格があり、優れたサーヴァントを召喚するところこそ聖杯戦争の肝だと言える。

サーヴァントには7人のマスターに対応して7つのクラスがあり、それぞれ異なった性質を持っている。一概にどのクラスが良いかは断ずることはできないが、前回最後まで残ったサーヴァントはセイバーであったと記録に残っている。現時点で最優を問うならば間違いなくセイバーであろう。

またサーヴァントを現界させるにあたって必要なものがある。サーヴァント、つまり英霊縁の聖遺物が必要になる。それを手に入れる段階から聖杯戦争は始まっていると言える。

「つまり……だ。聖杯戦争においてなおお金や地位、家柄っていうものがのしかかってくるのを」

やれやれといった風に首を横に振りながら頭を垂れている金髪の青年がしゃべっている。周りには

「でも君ぐらいの実力があれば多少のハンデはあってもいいと思うけど」

ぼさぼさな黒髪の小柄な（東洋人なら平均程度）日系人と

「そうね、でもクロウリーが言いたいことはそういうことじゃないんじゃない」

同じく黒髪だがさらりと流れる様な髪質の美女（本国なら絶世の冠詞がつく）日系人がいた。

クロウリーと呼ばれた青年が頭を上げる。

「そうだね。まず慎二郎の言うことはもつともだ。ぼく相手なら多少のハンデはあげるべきだと思うし、そうじゃないとつまらない。そうもつともだね。しかし対する朱音さんの指摘も的を射てる。なぜかって？ぼくがハンデを『あげる』のはいいのさ、楽しむためには多少は難易度がないとね。だけどぼくの関知しないところでハンデが『ある』のはあまり気持ちよくないよね。ただでさえここはそういうのが多いんだからさ」

クロウリーたちが立っている場所は時計塔と呼ばれる場所である。魔術の総本山であり、クロウリーたち学徒の学びの場所でもある。

「権威主義が悪いとは言わんさ。彼らにはそれしか誇るところがないのだからね。とはいえそれだけでは寂しかろうよ。仮にも魔術師だよ、ぼくたちは。血筋で魔術が究められるならばくたちが学ぶ意味はないと思うがね」

その発言を受けて朱音と呼ばれた黒髪の乙女が反論した。

「あら血筋で魔術を行うことはあながち間違いじゃないわ。魔術は血から血へ受け継がれてゆくものでしょう。あなたが例外中の例外なだけで一般的には血筋は魔術師の優劣を決めるある程度の尺度にはなるはずよ」

「しかしだね」

「

その光景を眺めながら黒髪の少年はぼさぼさの髪をいじる。少年間桐慎二郎はうらやましそうに眺めていた。慎二郎はクロウリーと

は違い絶対的な才能はなく、朱音のような熱意も持ち合わせてはいない。がらんどうであつた。

間桐、マキリという由緒正しい血筋でありながら、才能に乏しく、次男坊でもあるために何かを引き継ぐ必要もなかった。さらに臍硯以来の才能を持つ兄慎一郎の存在も手伝つて慎二郎は魔術に対する情熱を持たなかつた。持てなかつたのだ。

むしろ剣術などの方面には興味があり、それに情熱を燃やした時期もあつたが魔術師である自分を考えると虚しくなり異国に渡る際にはすつぱり縁を切つていた。

間桐慎二郎はがらんどうである。

討論が終わり、クロウリーが苦い顔をして言う。

「結局朱音君には一度も口では勝てなかつたね。まあ魔術で負けたことはないからおあいこかな。それではそろそろ向かうとするよ。あちらで準備もあるだろうしね」

クロウリーが指を鳴らすと旅の荷物らしきものが現れた。左手には赤い令呪が

「ではでは遠坂朱音、我が恋人だつたものよ。君の故郷冬木の地で再びまみえよう。今度は好敵手として是非是非ぼくを愉しませてくれたまえ。我が友慎二郎もまた達者で。さあさあ楽しい楽しい旅の時間だ。ぼくはどこまで往けるかな」

クロウリーがもう一度指を鳴らすとその場から荷物一式とクロウリーの姿が消えた。

稀代の怪物アレイスター・クロウリーはこの日を境に永遠に時計塔に足をふみいれることはなかつた。

> i 3 3 4 8 7 — 4 2 3 7 <

貴人発つ

クロウリーが去って数日、慎二郎は朱音と一緒に昼食を取っていた。この時代黄色人種に対する差別は大きく、魔術師であっても例外ではなかった。とはいえ朱音に関しては実力で他を認めさせ、時計塔で学ぶ生徒たちには一目置かれていたが。それでも昼食や休日と言ったプライベートな時間は二人でいることが多かった。朱音とクロウリーが交際する前は……だが。

クロウリーがいなくなつて久しぶりの二人での食事に慎二郎は心が躍った。何故朱音が誘つたのか、慎二郎は理解していたが、口には出さなかった。今はこの時が長く続けば良いそう考えていたのだ。イギリスの不味い料理に舌包みを打ちながら、二人は黙々と食べていた。

ふいに朱音が口を開いた。

「あのね慎二郎」

「おーーーーーほっほっほ！ソフィア・ヌアザレ・ソフィアリ参上ですわ！」

朱音の言葉を遮つて場に現れたのはソフィア・ヌアザレ・ソフィアリ、麗人と呼ばれる魔術師である。血のように濃い色の赤毛と圧倒的美貌を持つて時計塔に君臨している。もちろんソフィアリ家は名家中の名家であり、ソフィア自身も一級品の魔術回路とそれに見合う実力を兼ね備えている。そして何より

「これを見なさい遠坂！わたくしの右手の甲ですわ。ここに刻まれたるわ令呪。つまりわたくしは聖杯に選ばれた魔術師！どうですか？この紋様の美しさ、まるでわたくしに勝利せよと聖杯が言っているようですよ！あらあらお猿さんには令呪がありませんのね」

> i 3 3 4 8 8 — 4 2 3 7 <

啞然としていた二人であったがふいに朱音が左腕の袖をまくった。

「ふえ？」

「遠坂家を代表して私遠坂朱音も聖杯戦争に参加することになったわ。よろしくねザ・サードちゃん」

瞬間。ソフィアの顔が自前の赤毛と同じくらい沸騰した。慎二郎は顔を覆って巻き添えを食らわないように後ろへ下がった。慎二郎の胸中は穏やかでなかったが目先で『災害』が起こるのをわかっていて指をくわえているほど慎二郎も愚かではなかった。

「死ねえ！」

朱音とソフィア両名が同時にガンド撃ちを放つ。これは指差しして相手に魔力をぶつける、言ってみれば初歩である。しかし単純ゆえ

爆発

爆発

大爆発

術者次第で威力は跳ね上がる。朱音とソフィア、時計塔の若手で五指に入る実力者がぶつかると

「またソフィアりと遠坂だ！」

「巻き込まれたら死ぬぞ！」

「いやだあ死にたくないよお」

「俺帰ったら結婚するんだぶふああ！」

ちなみにザ・サードとはソフィアの成績が万年三位、つまりクローリーは別格としても朱音にも劣るところからつけられた陰口である。ただし実践はご覧の通り

「猿のくせに中々やりますわね！」

「成績不良の割にはやるわね！」

互角である。この光景が何度か繰り返されたことにより差別は畏怖へ変わっていったのだ。その頃慎二郎は隅で昼食を食べ終わっていた。朱音の金魚のフンだった慎二郎にとって慣れたものであった。

「はあはあ……やりますわね」

「ふん、貴女もね」

ソフィアは息を整えると朱音を見やる。

「まあいいですわ。無礼は今に始まったことでもなし、今さらというものですわ。ただし遠坂！いえ朱音！聖杯戦争ではわたくしソフィア・ヌアザレ・ソフィアリが勝利しますわ。必勝の聖遺物も実家から送られてきましたし、負けはあり得ませんわ！」

朱音もまた乱れた髪を整えソフィアを見やる。

「英霊の格を誇るようじゃ貴女も底が知れるというものよ。それに残念でした。遠坂もまた必勝の聖遺物よ。まあ誰かさんと違って聖遺物を誇ったりはしませんけれどね」

ソフィアは眉間にしわを寄せて。

「いちいち癪に障りますわね。ケリは聖杯戦争でつけますわよ。わたくしに負けるまで負けることは許しませんわ」

朱音は微笑んで。

「そうね。決着は聖杯戦争で……承りました麗人」

両者そろって

「「ごきげんよう」「」

同時に背を向けた。

そのまま慎二郎の前に歩いてきて朱音は言う。

「そういうことだから慎二郎も元気でね。怪我と病気には気をつけて。さようなら」

そうして遠坂朱音とソフィア・ヌアザレ・ソフィアリは同日時計塔を旅立った。この二人もまた時計塔に戻ってくることはなかった。

王参戦

遠坂朱音と麗人が去って数日後、時計塔に激震が走った。

ロード・バルトメロイ聖杯戦争に参戦す。

バルトメロイとは時計塔創設時から数百年魔術師の頂点に立つ家系である。その魔術回路は敬意と畏怖を持って「フルブラッド 貴い魔術回路」と呼ばれ、他の追隨を許さない。最強にして至高の魔術師の血筋。

その現当主ロード・バルトメロイはロード（王）の名に恥じない至高の魔術師であり、時計塔院長補佐、魔導元帥でもある。

それが一地方の『小競り合い』に参戦するなど、『常識的』な魔術師たちから見てもあまりに奇異に映った。

同時に他の参加者にとっては絶対的な宣告でもあった。

某国上空

「バルトメロイ参戦かあ……たあゝのしみだなあ。そうは思はないかい？ ああ流石にこんな所には人はいないか。寂しいね。寂しいねえ。さあぼくは魔導元帥どのに通用するのかな？ しないのかな？ 最高にホットなニュースをありがとう鳥さん。お礼にもう二、三枚翼を増やしてあげよう」

『空中』を歩くアレイスター・クロウリーが何かをつぶやき指を鳴らした。そうすると並走していた鳥の羽がみるみる増えていき二十枚以上の羽を持つ鳥になった。

「さあお行き。今の君に勝てる鳥はいないよ……たぶんね。その羽の力でイカロスのごとく空の果ても目指して御覧」

鳥は力強く一声鳴いて、一瞬で地平の果てに消えていった。

「おっほあ、速い速い！ ぼくも生やしてみたいけど生憎取り外しが効かないからなあ……まあおいおい研究すればいいか。とりあえず

バルトメロイ！たあのしみ！」

クロウリーは軽く空を蹴ると、先ほどの鳥と同じくくらいの速さで地平の果てに消えた。目指すは冬木の地である。

船上

「どういうことですよ！」

開口一番ソフィアが朱音に怒鳴りこんできた。ここは日本行き豪華客船の上であり、ソフィアと朱音は二人揃って同じ便に乗っていたのだ。

この時代日本行き便などそうそうないので同乗することになるのは目に見えていたが。

「何よ、ソフィア。私たちは一応敵同士なんだからもう少し……」
「そんなこと瑣末なことですよ！それよりも聞きました？かのロード・バルトメロイが参戦するという情報」

朱音はうんざりするような顔をしてソフィアを見る。

「そんなこととうに知ってるわよ。だから何？白旗でもあげろっていうの？冗談！聖杯戦争がサーヴァントのみで決まらないように、マスターがどれほど凄くても勝ちの目はあるわ。貴女もマスターならもっとしゃんとしなさいな」

ソフィアは顔を真っ赤にしてそっぽを向いた。

「と、当然わたくしも負ける気はありませんわ。ただあなたのようなお猿さんがびくびくしてないか心配、もとい憐れになってなっただけですわ！失礼！」

去ってゆくソフィアを見つめて朱音は思う。

（魔術師なら当然バルトメロイの名は知っている。その名にどういう意味があるのかも……ソフィアがああなるのも無理ないわね。私だって　　）

ソフィアから見えない位置、朱音の右腕は静かに震えていた。

時計塔

「終わったな聖杯戦争」

「ロード・バルトメロイだ。しょうがないさ」

「麗人と遠坂の小競り合いが見れなくなるなあ」

「あれが小競り合いだと？」

様々な情報が飛び交う中、慎二郎は無気力にテラスでたたずんでいた。慎二郎にとって聖杯戦争は雲の上の話であり、魔導元帥などもつと想像に難い存在だった。

ふいに慎二郎は通路の先に人影を見つけた。圧倒的な存在感に慎二郎は腰を抜かしてしまう。

人影はちらりと慎二郎の方を見ると、そのまま地下の方へ潜って行った。

慎二郎は理解する。

(あれがロード・バルトメロイ……か)

そして一つ確信した

時計塔最深部

「何の用だゼルレッチ！」

深い闇にバルトメロイの怒声がこだまする。

「この俺を呼びつけるとは相応の覚悟は出来ておろうな」

闇が揺らめきそこから一人の老人が現れた。

「ふむ。久しいなバルトメロイの坊主。ぬ、坊主は一代前だったか」

バルトメロイが警告なくガンド撃ちを放つ。本来ならば一撃で老体一つ消し飛ぶ威力なのだが闇に吞まれていった。

「ちっ、俺はバルトメロイだ。じじい覚えておけ。俺はでしゃばりのじじいに敬意を払うようには出来ておらぬ。さっさと要件を言え。まさか俺と戦うというのではあるまいな老いばれ」

ゼルレッチは嗤い、どこから現れた椅子に腰を下ろした。

「まあよかるう。要件と言えば坊主、こ度の聖杯戦争に参加すると

か

バルトメロイは鼻を鳴らし答える。

「ならばどうだと言うのだ？魔導元帥が参戦してはならぬという決まりはあるまい。俺が参戦するもしないも俺の自由だろう」

ゼルレッチはからかいの色を含んだ目でバルトメロイを見る。

「もちろん自由だ。が理由がわからぬ。何故今さらバルトメロイが聖杯など欲する？」

「バルトメロイは聖杯を欲しない。ただわけもわからぬ雑種が粹がつていると聞いてな。しつけてやろうと思ったまでよ」

「雑種……アレイスター・クロウリーか？」

バルトメロイは口にするのも汚らわしいといった体で首を縦に振った。

「くくつ、それなら構わん存分に力をふるえ。老体は見物して愉しませてもらうわ」

ちつ、と吐き捨ててバルトメロイはゼルレッチに問う。

「聞きたいことはそれだけか？」

「そうだが？」

バルトメロイが踵を返して退室しようとした。

「それではな。さよならよ」

バルトメロイが振り返り答える。

「今度会ったら八つ裂きにしてやる。老いぼれ」

ふとバルトメロイは立ち止まってゼルレッチに問うた。

「ところでじい、この時計塔に俺の不可視の魔術を見破れるやつはいるか？」

ゼルレッチはふむ、と考え込み答える。

「ロードでも厳しかろう、今はおらぬよ。どうかしたのか」

「いや……なんでもない」

そのままバルトメロイは歩き去った。

「さようなら。坊主」

ロード・バルトメロイもまた二度と時計塔に足を踏み入れること

はなかつた。

> i 3 3 4 8 9
— 4 2 3 7
<

参加者出揃う

アインツベルン冬の城

「あはは、冷たいよママ」

雪まみれになりながら庭園を走り回っている少年がいた。

その周りには母親と思しき人影と、大勢の使用人が控えている。

「待ちなさいユーリ」

ママと呼ばれた女性は少年をユーリと呼んだ。

呼ばれたユーリはさらにうれしそうに庭を駆けまわる。

> i 3 3 4 9 0 — 4 2 3 7 <

その様子を城から見ていた老人が口を開く。

「あれでは勝てぬか……」

そばに仕える使用人が答える。

「残念ながら。さらに言えば今度はかのロード・バルトメロイも参戦する様子、勝てるとすれば奇跡かと」

老人が嘆息し庭を見下ろす。

「出来が悪いのは遺伝よ。所詮錬金術しか能のない家系じゃ。とはいえ参戦せぬのは御三家の沽券にかかわるのう……もったいないが『あれ』を与えよ。残りはすまいが惨敗はせぬじゃろうて」

使用人が恭しく一礼をし下がる。

一人となった老人は自分の孫を見降ろす。魔術師としてはかなりの才能を有する孫を見て老人は齒噛みする。

「せめてあれの母親が生きておればあれほど弱くはならんかったじやろうに」

ユーリが母と呼んでいるものも、ここでかしまっていた使用人も全てがホームンクルスであった。

「次こそは必ず……第三魔法、ヘブンスフィールへ……必ず」

老人はもはや忘れていた。自分たちの初志がなんであったのかを。魂の劣化、老いは着々とアインツベルンを蝕んでいた。

間桐邸

「慎一郎、万全であろうな」

老人が問うた。

「じい様、私が万全でないときがありましたか？」

青年が答える。そして老人が嗤う。

暗い闇が間桐邸を覆っていた。

「ところでご注文の品はご用意できましたでしょうか？」

老人は渋った顔で答えた。

「一応、明日にでも届くわい。しかしなんでまた『あれ』なのじゃ。他にもっと有利なクラスがあるように」

慎一郎は立ち上がり窓を開けた。

「簡単ですよ。じい様。私にとって最強の手札が『あれ』だということだけです」

窓の外には一羽の烏が飛んでいた。

「私は聖杯戦争を勝つでしょう。そして間桐は遠坂、アインツベルンを差し置いて第三魔法に至るのです」

慎一郎が一睨みすると烏の周りに大量の蟲が現れ、烏を一瞬にして食い散らした。

「頼むぞ、慎一郎。お主に間桐の命運を託すわい」

慎一郎が恭しく老人にかしづいて言った。

「お任せあれ。必ずや臍硯様の期待に応えて見せましょう」

老人は嗤い、慎一郎も嗤う。

ここは毒虫の住む館。常人では測れぬ闇がそこに横たわっていた。

時計塔

慎二郎は自室にて研究を行っていた。慎二郎は非才ながらも間桐の特性である「吸収」に特化した魔術師であったため、その分野で

はある程度の功績は残していた。

今行っている研究はそれの実践利用の研究であり、錬金科の知り合いに、幼少期の朱音の写真をちらつかせて知恵を出させ、ある程度は形になっていた。

「ふう」

慎二郎は椅子にもたれかかった。

最近ではめつきり人付き合いも減り、研究に没頭するという模範的な魔術師になっていた。もちろん友人がいなくなったのが最大の原因である。

慎二郎はそばにあったファイルを見る。そこには聖杯戦争参加者の情報が載っており、ある程度の考察もそこに記されていた。慎二郎が独自にまとめたものであり、慎二郎がどれほど時間を持て余していたかの証明でもあった。

「あと一人か」

あと一人、あと一人だけ聖杯戦争参加者の枠が残っていた。

慎二郎は思う。もしかしたら自分かもしれない。ということ。

しかし同時にこうも考える。自分のようにがらんだような人間が聖杯に選ばれるわけがないと。

「俺はがらんだからなあ」

瞬間

「あつ！」

右手の甲に焼ける様な痛みを感じた。

赤く、紅く、なぞる様に、浮かぶように、刻まれる。

令呪が。

「そんな……馬鹿な」

慎二郎は狼狽していた。妄想はしていた。自分が聖杯に選ばれる夢も何度も見ていた。しかしあり得ないのだ。聖杯は欲するものにこそ与えられる。ならば

「俺が選ばれることはあり得ない。俺には聖杯にかける願いなんてない。俺はがらんだのに……なんで」

7人目のマスターが決まった。

慎二郎往く

慎二郎は荷造りをしていた。

聖杯によつて選ばれてしまった以上、聖杯戦争に参加しなければならぬためである。

無論令呪を他者に譲ることも不可能ではなかったが、御三家たる間桐の名が慎二郎にその選択肢を選ばせなかった。むしろ考えられなかったとも言える。

「はあ」

慎二郎は今日何度となく吐き続けた、溜息を吐いた。

慎二郎にとつて聖杯戦争に参加する理由は皆無なのである。本人が自覚するようにならざるにわざわざ聖杯を使つて叶えるほどの願ひはないし、焦がれるものもない。遠坂朱音を欲する気持ちはあれどそこに遠坂朱音以外の意思が介在することを慎二郎は善しとしなかった。

よつて慎二郎に願ひはない。

さらに言えば慎二郎は争いを好む性質でもなかった。昔剣の道を志したのも非才な魔術の代わりと言う側面が大きかった。それだけではなかったのだが、今の慎二郎は覚えていない。

「はあ」

一日の溜息回数は絶賛最多記録を更新し続けていた。

「よし準備完了」

慎二郎は荷造りを済ますとぐつと一伸びした。

周りを見渡すとすっきりした室内が目に入り、続いて大きな荷物入れが目に入った。三年もいた場所だったので存外荷物が多くなつていたことに慎二郎は軽く驚いていた。

コンコンと室内にノックの音が響いた。

慎二郎は首をかしげながらも扉に向かう。慎二郎の部屋に客が訪れることなどめつたにない。というより魔術師は他人の部屋をおい

それと訪ねるものではないからである。魔術師が他人の部屋に訪れるときは他者の研究を横取りする時と相場が決まっている。慎二郎は若干警戒しながら扉を開いた。

共同研究していた錬金科の魔術師であった。

「やあマキリ」

かなり中性的な顔立ちのフランス人魔術師であった。慎二郎が講義で何度か顔を合わせるうちに多少話すようになった間柄である。ちなみにあまりに中性的過ぎる、というより性別不詳過ぎたので、知恵を出してもらおう時には朱音の写真とクロウリーの写真の二枚をちらつかせ、朱音の方、しかも幼少期の奴を持って行ったつわものである。慎二郎はこの魔術師を男、しかも警戒に値するやつだと認識している。その他の人格は尊敬に値すると慎二郎は考えているが、「これこの前渡された奴を仕上げておいたから」

二振りの刀が手渡された。

研究の成果たる二振りの刀は魔術礼装であり、慎二郎の研究の集大成ともいえる逸品である。

「でもいいのかいマキリ。これをボクとの共同研究として発表してさ。基礎、展開ともにキミが考え、構築した理論の上にボクが最後にちよつとだけ知恵を貸しただけじゃないか。それも錬金科の連中なら大して労さずやれる程度のこと。ちよつとフェアじゃないと思っけどね」

困惑している魔術師が言う。確かにこの研究は慎二郎の三年に渡る時計塔での生活の集大成であり、その中でこの魔術師が力を貸した部分と言うのは決して大きくはなかった。

それでも慎二郎は笑って

「構わないよ。君がいなければ今間に合うことはなかっただろうし、煮詰まっていたのは事実だからね。錬金は正直門外漢だから本当に助かったんだ。むしろ感謝してるくらいさ」

相手の魔術師は少々驚いた様子で慎二郎を眺めていた。

「前々から思っていたけど……キミは本当に変わっているね。魔術

師としては失格だろうけど尊く思うよ、キミのその性格をね。ボクのような捻くれた奴でも容易に信頼させてしまつのは一種の才能だよキミ」

魔術師は慎二郎に、いや他人に初めて見せるであろう笑顔を見せた。それは相手が男であると考えている慎二郎であつても魅了するに十分な美しさであつた。

「そうだ、キミにはこれをプレゼントしよう。聖杯戦争から生き残ることを祈願してね。我が家に伝わる幸運のお守りだ。真偽はわからないし、興味もないが聖女の遺灰が入つたペンダントだよ。まあ気休めにはなるだろうさ」

そう言つて魔術師は慎二郎の首に小瓶のようなものを吊るしたペンダントを着けた。慎二郎はあわてて言う。

「ちょ、ちょっと待つてくれ。俺は感謝されるようなことはしてないし、共同研究で発表することに関しては納得した上で君に依頼したんだ。それでこんな大事なものを戴くわけには……それになんで君は俺が聖杯戦争に出るつて知つてるんだい」

あわてた様子の慎二郎を見て魔術師はクスクスといたずらっぽく笑つた。

「いいかいマキリ。キミが聖杯戦争に出るということを知らない奴は時計塔にはいないよ。キミ、隠してたつもりだったのかい。手袋もしてないのに。令呪が丸見えだよ。ついでにそのペンダントはボクの気持ちさ。しいて言うならキミが前ごちそうしてくれた日本料理つてやつので金とでも考えてくれたまえ。あれは素晴らしかった。料理に関してはフランスこそ世界一だと思つていたが少し揺らいだよ。イギリスのゲロとは比較するのもおおこがましいレベルさ。本当に大したものじゃないんだ気にしないでおくれ」

慎二郎はなおも返そうとしたが魔術師は颯爽と扉の前に立ち言い放つた。

「どうしても返したいというならキミは帰つてきたまえ。そうしたら受け取ろう。次はこちらが至高のフランス料理をごちそうする番

になるかな。きつと満足させてみせるさ。それではえーとごほん……マタアイマシヨウシンジロウ」

魔術師は慎二郎の部屋の外に消えた。

慎二郎は少し照れながら扉の外に向かって言った。

「メルスイボク！」

聞こえたかは確認するすべはないが慎二郎は気分よく荷物を背負う。魔術師同士にも友人関係は成立することがある。それがたまたまなく慎二郎の心を満たした。それほど思い入れもなかった時計塔であつたが戻ってくるのも悪くないと慎二郎は思った。

その日の夜、最後のマスター間桐慎二郎は時計塔を旅立つた。

しかし彼もまた、この日を最後にして時計塔に足を踏み入れることはなかった。

> i 3 3 8 3 7 — 4 2 3 7 <

慎二郎の記憶ではこの老人の姿形が変容したことはない。顔はしわくちやで腰は曲がり、小さな背はより小さく見え、一見普通の老人にしか見えない。慎二郎の19年の人生全ての記憶にこの姿の老人が映っている。

しかし慎二郎は知っている。この老人が化物であるということ。「ただいま帰りましたじい様」

この老人相手に間桐の人間は礼を欠かさない。恐れているのだ。化物は口を開く。

「ふむう、よう帰ってきたな慎二郎や。長旅疲れたるう、ゆっくり休むんじゃぞ」

慎二郎の背に悪寒が走った。老人の目は一点を見つめている。右手の令呪を。老人の目は血走り、爛々と怪しげな光をたたえている。「じい様。慎二郎は疲れておりません。聞きたいことが一つ、希望が一つございます。それが終われば、兄も気にするでしょうし、どこか手近なところに拠点を構えるつもりです」

老人の目が細まり視線が慎二郎を舐めまわす。

「よかるう……申してみい」

慎二郎はほっと一息して話し始めた。

「聞きたいことはじい様もおわかりでしょうが新街で起きた戦争の詳細についてです。希望に関してはもうお聞きになつていてでしょうし、今見ておられた通り、不肖の間桐慎二郎も聖杯に選ばれました。つきましては一つ聖遺物を融通してはもらえないでしょうか」

老人は聞き終わると立ち上がり、暖炉の前に立つ。炎の影が巨大化した老人に見えた慎二郎は内心冷や汗をかいていた。

「ふうむ、情報に関しては後で詳細を渡してやる。しかし聖遺物に關してはおいそれとは首を縦にふれんのか」

慎二郎は啞然とした。逆はあつても、聖遺物が手に入らない状況に陥ると思わなかったのである。聖杯戦争の参加者は7名であり、例外はないとされる。ならば間桐にとっては二枚目のカードはのど

から手が出るほど欲しいはずであるのだ。

(何故?)

臧硯は慎二郎の心情を察したのか言葉を発した。

「何故と思うのも無理はないわい。実を言うとこの前少し手違いがあつての。聖遺物がもう一つ必要になつたんじゃ。それに大金を注ぎ込んでの。言いたくはないがお主のような才乏しき者にかける金はないんじゃ。それに今からではとても間に合わんじやる。悪いこととは言わん……む?」

臧硯の目が慎二郎の胸元に止まった。又タリ。臧硯は嗤い続ける。「悪いことは言わん。令呪を誰か信頼できるものに渡すのじゃ。もしくはその胸元にあるペンダントでも使えばええ。なあにそれも見たところ何かの聖遺物じゃ。何が出るかはわからぬがないよりましじやる。兄と共闘なぞは考えんでいい。お主ではあれの足を引つ張る結果にしかならんじやるうて」

慎二郎は忘れていた。自分が半ば放逐されるように海外へ飛ばされたことを。初めから臧硯は慎二郎に何も期待していなかったのだ。「もし参加するならば早く召喚することじゃ。聖杯を満たすためには7人のサーヴァントが必要不可欠。参加せぬでも早めに令呪を他人に渡せい。すでに聖杯戦争は始まつておるのだからのう」

又タリと嗤つた臧硯を見て慎二郎は思う。

(この化物は出来の悪い孫が七転八倒するのを愉しんでいる。わかっちゃいたけど……ここに居場所なんてなかったんだ)

慎二郎は一礼して退室しようとする返した。

「おお、後で詳細は伝えるがの、すでにアインツベルンのマスターが脱落したわい」

慎二郎はとつさのことで反応が遅れた。

老人が又タリと嗤い繰り返す。

「アインツベルンのマスターが死んだのじゃ」

老人は嗤う。慎二郎はたださえ気分が悪かったのになおさら気持ち悪くなった。

(なんで人が死んでこんなに嬉しそうに笑えるんだよ！)

「失礼します」

慎二郎が退室した後、臓硯の部屋に一つの人影が増えた。臓硯は人影に向かい声をかける。

「これでよかったかの？ 慎一郎や」

慎一郎と呼ばれた人影は闇の中でにやりと嗤い。

「ええ、じい様。私にとってあれは邪魔でしかありません。使えぬ駒はあるだけ邪魔、無駄に投資するのは愚かというものでしょう。しかしあれが聖遺物を持っているのは意外でした。じい様の見立てはどうですか？」

臓硯は嗤い答える。

「外れじゃろう。時代が新し過ぎるわい。まあ年を重ねるのが良い英霊ではないかの。少なくとも時代の壁を乗り越えて伝えられた重みはある。まあ数合わせにはちょうどよからうてかっかっか」

臓硯の嗤いが屋敷中にこだました。

> i 3 3 8 6 9 — 4 2 3 7 <

アインツベルン散る

慎二郎は間桐の所持するもう一つの別邸に移動していた。

これは現間桐邸が間桐の術師に合わない可能性が芽生えてきたため臓硯が用意したものである。予備の邸宅ではなく新居であり、近々移る予定であった。

「さて、と」

最低限生活環境を整えた慎二郎は考える。自分はいったい何がしたいのか、何ができるのかを。

(じい様の言うとおり出来そこないの俺が聖杯戦争を勝ち抜ける可能性は極めて低い。でもこのまま見過ごせるのか？俺は。たぶんああいっような犠牲はこれからも増える。むしろ激化していくだろう。魔術師にとっては一般市民の犠牲など大事の前の小事でしかないのだから)

慎二郎が思考にふけっているときジリリンと電話のベルのような音が鳴った。もちろんただの電話機ではない。魔術師の連絡道具であり、遠方からの情報もタイムラグなしに入手できる。まだ電話が普及していない時代において魔術師が一般より優れていた一つの例である。

「そうか……詳細が送られてくるんだったな。期待してないってのに妙な話だけだよ」

機器の前に慎二郎は移動すると、タイプライターのような形の機械から紙が出てきた。慎二郎はその紙を手に取り紙に目を落とす。そこには

「ママ、ここが冬木なんだね」

銀髪の少年が興味深そうに周りを眺める。その後を追うように同じく銀髪の女性が付き従っていた。

「ユーリ、あまり目立ち過ぎてはいけませんよ。まだ七人目は冬木の地に入っていないようだけれど、すでに聖杯戦争は始まっているのですからね」

そう言う女性であったが表情は穏やかであり、口調にも優しさにじみ出ている。ユーリは気を良くして軽快に跳ねまわる。

「平気だもん！だって僕らには最高のサーヴァントがいるんだからねっライダー」

ユーリの傍らに黒い影が噴き出してきた。それは徐々に形となつていき人をかたどる。

「まあご期待には添いたいですがねぼっちゃま。あまり過信してはいけませんぜ。あつしの時代にはあつし以上の怪物はいませんでしたよ。ええ。ですがそりゃあつしの時代のこととして他の時代は知りませんでさあ。くひっ」

突如現れた人物はその異様をもってまわりを驚かせる。まず黒い髪も黒く、服も黒い。編んで垂らした髪はぼさぼさであり、無理やりリボンで結んでいる。服も薄汚れておりところどころ穴もあいている。目はぎらつき、口は終始にやけ面、肌はくすみ、酒とたばこのにおいを全身に纏っていた。異様の『女』は続けて言う。

「こんな真昼間に外人が二人、いやあつしを含めりゃ三人。目立つて目立ってしょうがねえ。こんなもん敵さんにとっちゃあ金銀財宝が丸裸でダンスしているようにしか見えんでしょうよ」

ユーリは肩を落とした。銀髪の女性はキッとライダーを睨みつける。

「ライダー、主の前では服装を正せとあれほど申しておいたはずです。それに主に対して口が過ぎるのではありませんか。ユーリは初めてアインツベルンの城から外に出たのです。多少はしゃぐ気持ちも理解できようというもの。そもそも勝利を誓い聖杯戦争に参加した貴女がそのような弱腰でどうするのです」

ライダーは笑みを深めた。

「もっちらん勝ちますとも。俺様、いえあつしにも『海賊王』たる

誇りがありましたね。くひ。ただし過信は禁物ってことであ。ええ」

> i 3 4 3 5 8 — 4 2 3 7 <

銀髪の女性は下種を見る様な目でライダーを見る。この墮落を象徴するかのよな女はユーリにとって悪影響が過ぎる。女性はさらに付け加えた。

「加えて昼間、街中でサーヴァントを用い戦おうなどというのは常識の埒外。もちろん魔術師、一般人共にです。一般人なら人道がありましようし、魔術師なら秘術の隠匿があります。こちらは魔術師にとつては義務に等しく、破るものは魔術協会を敵に回すに等しいでしょう。その程度の思慮はみな持ち合わせているはずです」

ライダーはへらへら聞き流していたが、ふと人垣の先を見る。

「いやなに……どこの世界にも常識の外側にいるやつつてのがあるもんでさあ。そういうやつは大抵仲間外れになったり罪人になったりするもんです。実はこの大抵つてやつがミソですね。まあなんというか残りの一部は得てしてこう呼ばれるんでさあ……英雄つてねえ！」

ライダーは腰の短銃を引き抜くと人垣に向かって乱射した。そのうちほとんどは人垣に当たり、悲鳴がこだまする。そして残りの数発は人垣の先へ抜けた。

「ライダー！何をしているの！？これでは……あつ！」

人垣の先には二つの人影が立っていた。

「ちつ、『どいつも』逃がすな。ランサー」

人影の一つが動く。その速さは疾風。一気に人垣を越えてライダーに詰め寄った。

「なつ！？銃弾は確かに『当たった』じゃねえか！生身の部分にも着弾しただろうがよっ！」

ライダーは迎撃のために短銃を投げ捨て背負っていた長剣を振るう。

衝撃

罅迫る。ライダーは驚愕、そしてもう一人の英霊、ランサーは飄々と答えた。

「わりいな女。俺は不死身なんでね……傷つかんのよつとあ！」

ランサーは自身の長槍を振るライダーごと周りを吹き飛ばした。そして逃げようとする一般人を一足飛びに数人薙ぎ殺して言う。

「おーし、全員動くなよー。逃げたら死んじやうからなー」

槍に首を刺し掲げてランサーは言った。

場は一瞬にして恐慌状態に陥り、さらに数人場から離脱しようとするが全てがランサーの槍の餌食となった。

ユーリは未だに何が起こったのか理解できなかった。それでも一っただけ理解する。アインツベルンの城では誰もがユーリに与えなかった感情、恐怖を。

「うっ、うわああああああ」

ユーリは駆けた。後ろへ。逃げたのだ。全てを放り出して。

「うん？」

ぐるんとランサーの首が回り逃げ出そうとするユーリを捕捉する。

「はあ……坊主が逃げてどうするよ。マスターさんよっ！」

ランサーは一瞬で距離を詰めた。

「ほい殺った」

ランサーの槍がユーリを突き刺す瞬間に銀髪の女性が割って入る。

ランサーは意にも介さず女性ごとユーリを貫こうとするが

「そうはさせません！」

女性が『腕』から剣を引き抜き槍を受け止めた。

ランサーは軽く動揺しながらも連続して打ち込む。その全てを女性性は受け止めた。

「んなつ！？おいおい最近の女はこの俺の槍を捌くのかよ。聞いてねーぞつと」

女性が何事かをつぶやくと女性の『目』が光り輝きランサーを灼いた。

「これでっ！」

目を模したルビーの魔術礼装が砕け、片目を失いながらも黒こげになったランサーの心臓に剣を突き入れた。

「ユーリ、貴方は私が守ります。だから貴方は……」

銀髪の女性が振り向くと、ユーリは女性を見ていた。その表情は女性の期待したものと真逆の表情であった。

「お、おまえ、は、ママじゃ……ない！助けてママ！どこにいるの？ママ！ママ！ママア！」

女性は愕然とした。それでも精一杯の笑顔を浮かべてユーリに目を向けた。怖くないよ。私はあなたのママですよ……と。

「ユーリ。大丈夫怖くないわ。確かに私は貴方の母じゃないけれど私はごふっ！」

女性は下を向く。そこには血濡れた槍の穂先がテラテラと光っていた。

「言つたる？不死身だつてよ」

ランサーが槍を引き抜いた。女性は崩れ落ちる。ユーリはただ震えていることしかできなかった。

「はあ……これじゃあどつちがマスターかわかんねーな。恥ずかしくないのかね坊主よお」

ユーリの耳にランサーの言葉は届かず、ただ震えている。ランサーは溜息をついて槍を振り上げた。その瞬間

「ゆ、ユーリには……指一本……ふ、触れさせない！」

剣がランサーを貫いていた。ランサーは今度は自分が貫かれている様子を見て笑う。

「つくづくもつたいたいなあ。嫁に欲しいくらいだが……まあ鞍替えするような奴じゃなし……それに、どちらにしろもう終わりだ」

ランサーは胸に刺さった剣を引き抜き天に自前の盾をかざした。

「万象を灼き、万物に救済を。我が名はロード・バルトメロイ。我が名の前に全てよ平伏せ、世界は頭が高すぎる！」

あまりにもらしい詠唱を終えると、上空の大気が歪み始めた。光がその中心に集まり、辺りが薄暗くなっていく。バルトメロイがタクトのように腕を振り下ろした。

「帯に光が溢れた。」

優しく、慈愛に満ち溢れた光が人々の身体を大地を建物を包み込む。そしてその全てが熔けだした。歪みが収縮し消えた空間には小型の太陽が発生していたのだ。これぞバルトメロイの秘術の一つ。全十五小節の詠唱で以って全てを焼き切る極大魔術である。

「これでよからう。」

バルトメロイは秘術の隠匿という魔術師の義務を全ての目撃者を消すという手段で行ったのである。

ユーリは蒸発していく自らの身体を見ていた。それはあまりにも美しく、優しい光景でありながらもユーリの身体を侵食していく。それは恐怖であった。

（助けてっママ！）

ふいに身を灼く光に影が落とされた。それは醜く焼け爛れ、片腕もなかった。それでも

「ユーリ。大丈夫、私が付いています。だからちよつとだけ動かないでね。私は貴方の母じゃないけれど……それでも私は貴方を愛しています。だから……貴方は生きなさい」

銀髪の女性、ユーリの母代りとして生み出された名もなきホームンクルスは優しく微笑む。ユーリはその微笑みに満たされた気がした。ユーリは全てを思い出し、理解した上で灼熱の光の中母代りのホームンクルスを抱きしめる。

「ユーリ！？ダメ！貴方のきれいなお手手がやけどしちゃうー！」

ユーリは微笑む。

「いいんだよ……『ママ』」

『ママ』幾度となくそのホームンクルスに向けられた言葉。そしてもう二度と向けられることはないはずだった言葉である。ホームンク

ルスの目から涙が流れた。それは本来このホムンクルスの機能には
ないものである。涙が流れた先から蒸発していく。

「ずっと一緒だよママ」

『ママ』は微笑み

「ええ、ユーリ……ずっと」

二人は蒸発した。

> i 3 4 3 5 9 — 4 2 3 7 <

召喚

慎二郎は送られてきた書類に目を通した後、黙々と準備をしていた。聖杯戦争に参加するための準備である。

(これ以上……バルトメロイを好きにはさせておけない)

魔術師として至高の存在であることは慎二郎とて理解していた。魔術師としては尊敬すらしているのだろう。しかし

(彼は……やり過ぎる。人間としては最低だ)

魔術師とはかくあるべきなのかもしれない。それでも慎二郎は許せなかったのだ。関係のない他者を平気で巻き込むその姿勢を、こんな『つまらない』戦争に罪のない人々の命を消費する愚かさを。

だから

「……閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「Anfang」

「告げる」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、

(すまない……キミの幸運……使わせてもらおう！)

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　「！」

光が満ち溢れる。

魔方阵から放たれた光が世界を包み込む。慎二郎はとっさに目をつむった。温かいようどこか冷たい……そんな光が慎二郎を舐める。

(これは……この感情は……なんだ？『誰の』だ？サーヴァント？それとも　)

光の向こうに人影が一つ。それは光越しに見ても美しく、誇り高く、そして何よりも

光が晴れる。

(あ、あははは……勝った……勝ったぞ！勝てる、バルトメロイを止められる！)

「問おう。貴方が私のマスターか」

> i 3 4 9 4 5 — 4 2 3 7 <

それは乙女であった。見た目は明らかに女性であり、非力にしか見えない。だがその圧倒的存在感を見る者に畏怖と敬意を抱かせるに充分であった。

「そ、そうだ。俺が君のマスターで……えーとその間桐慎二郎です……はい」

どこか従いたくなるような雰囲気を持つサーヴァントを前にして慎二郎はとたんにしどろもどろになった。彼女は大して興味もなさそうに慎二郎から視線を外す。

騎士然とした彼女はどう見てもセイバーのクラスであった。それは聖杯戦争における最優のクラスであり、勝利に最も近いと言えるゆえに

(これならバルトメロイを止められるはずだ。それに俺には『これもある』)

「ところでマスター。私の敵はあそこでしょうか」

彼女が指差す方向に慎二郎は首を向けると

「なっ!?!」

街の方に火の手が上がっていた。

「っ!行こうえーと……セイバーだよね」

セイバーと呼ばれた英霊はこくりとうなずいてにこやかに笑う。

「ではマスター……突撃……ですね?」

どこか嬉しそうに発言してセイバーは部屋を飛び出して行った。

「マスター、我に続けてください」

慎二郎はあわてて

「あつ、はい！今行きます」
すでに主従が逆転していた。

召喚（後書き）

じゃじゃじゃーん！アインツベルンげきじょー！ぱちぱちぱち！

ここでは本編では語られない裏話的な感じでどどーんってやつちやうんだよ！

ん何ママ？

「えーとユーリ……テンションが……大丈夫？」

あはははは！何言ってるんだろママ。ぼくは大丈夫さ！なんたつて……もう死んじゃってるんだからねー！。さーて今週のアインツベルン劇場行ってみよう！いや逝ってみよう！

「……ユーリ（泣）」

まずは今回は第2次聖杯戦争だからびみょーに4次5次とは冬木の様子が違うんだ。なんといっても明治時代だからねっ！ねっ！もう幕末とか維新とかいろいろあったばかり！激動の時代だねっ！さらに言つとまだ二回目だからルール設定が微妙につてか盛大にザル！もう穴だらけ！大体昼間に戦うとかもうぶつちやけありえなわけ……ざっけんなんでボクが負けなきゃいけねーんだよ力ス！仕事しろや教会の野郎！……つて批判も的外れなんだ（しよぼーん）ほとんど今回教会、協会共にほぼノータッチなんだよ。むしろ今回の件があつて第三者機関ホシス！テラホシス！つてなつたらしいよっ！死んでるから知らないけどwww
まあつまりルールがしっかりしてたらボクが優勝かましてた可能性大！むしろ優勝確定！ざつまああああああwww
「でも負けたわよ」

どっかーん（ぐーぱん）

反抗期の息子に正論かますなんてママレベルが足りないぞっ！
さらにさらに間桐さん家は4次とかの教会の土地にあるんだよ。

譲つたらしいね。土地が合わないとか理屈こねくり回した拳句に
のわかめだつてよwwまっどうでもいいや！

ついでに『ママ』がホムンクルスってのはみんな知ってるよね。
書いてあったからねっ。ママはインツベルン製のホムンクルスな
んだ！すごい高性能なんだぞ！あのランサーの攻撃を捌く捌く。
いやはやすっごいでしょ！？まあ相手が悪かったけどね（泣）

最後に付け加えると4次5次の英霊に比べると見劣りしないメン
ツが集まってるかもしれない第2次聖杯戦争……でもやっぱり5次
とかの方が英霊に関しては強いんだ。英霊同士の相性はもちろんあ
るけどね。根本的に英霊の格は落ちちゃうの。なぜかって言うとね、
答えは時代であり、土地なんだ。明治時代の日本、しかも開国した
ばかりに外国の英雄なんざ知らないでしょ？アーサー王？信長の
がつえーよレベルだよww知名度それ自体が英霊の強さに結びつく
んだ。かの槍兄貴ことクーフリーンの旦那もヨーロッパで聖杯戦争
があつたらさらに2つほど宝具がプラスされたそうな。まあ日本人
は知らないわなあークーフリーン。だからあんなにがっかり性能だ
つたわけだねっwげいぼるぐー……！

「ユーリ……そろそろ怒っていいでしょうか？」

やっペママ完全に切れてるよ……みんなもママには逆らわないよ
うにねっ！ママ？あれ……なんで剣引き抜いて……H A H A H A H

A
……

「皆さん次回もまた見てくださいね。じゃんけんぽん！うふふふ」

あ……があ……死ぬう痛いよママあ

間桐邸の話は史実を基にした創作です。一応元々間桐に委譲され
た土地だつたらしいですがいつ今の家に移ったかは不明……って点
を利用していただきました。間違っている点や矛盾点は多々ある
と思われれます。ご容赦ください。

激突

冬木の地に昔から根付いている人間の集り深山町。そこで二人の魔術師と二人の英霊がぶつかっていた。

一つは疾風怒濤の槍裁きを誇る英霊と王者の風格を纏った魔術師。もう一つは

「なつんで、こんな化物と開戦早々やらなきゃならないんだよ!？」
「知りませんわ!」

「いいことを教えてあげようか、マイマスター」

「なんですの?」

「キ・ミ・があゝの化物につつかかかってっただらうが!僕は止めました。そりゃあもうめいっばい止めましたとも。まずは様子を見るべきだつて散々ね!さーて誰の所為でしょうかねマ・ス・ター?」

それは漆黒であつた。黒き鎧を身に纏い『槍』を振るう。

その姿は騎士であつた。

異様なフルフェイスの兜から少年のような高めの声が発せられる。

そのちぐはぐさが騎士の異様さをさらに際立たせた。

「……わ、わたくしはただ……一番槍の誉を奪われたことに耐えられなかつただけですわ!」

マスターと呼ばれた女性もまたこの冬木の地では異様であつた。

紅い髪をたなびかせ、紅いドレスを纏わせる。紅く、赤く、あかい。その灼熱は見る者を虜にする。

「ふーん、まあ……いいや。やつちやつたもんはしょうがないからね。最善は尽くすよ。僕は『騎士』だからね」

何かを察したのか黒騎士はトーンダウンした。

「ついでにあちらさんのマスターは……ちっ」

会話している間に疾風が割り込む。

「いいねーその余裕。俺にも分けてくれよ……なア!」

豪快かつ精密に繰り出された槍は黒騎士の首元を正確に刈り取る。

黒騎士もまたさるものでそれを身をひねってかわしざま己が槍を振るう。一進一退の攻防である。

> i 3 5 4 4 0 — 4 2 3 7 <

「悪くない悪くないよお前。俺とこんだけやり合えたのは指の数ほどつてえやつだ。大して速くないし、力も大したことねーけど……うんお前いいよ」

槍使いは口が裂けるほど口角を上げた。

「だから……もうちよい……愉しませろい！」
「なっ!？」

槍使いの巨体が跳ねた。身体にばねを仕込んでいるかのような、その様は黒騎士の想定をはるかに上回る。

「バーサーカー!」

女性の叫びが冬木の夜空に木霊した。

「……サ……カー!」

火の手の方へ向かっていた慎二郎たちは悲鳴のような声を聞きとつた。

「近いぞセイバー。それに……ランサーとバルトメロイの相手がわかったよ。麗人だ」

セイバーは怪訝な表情で慎二郎に目を向けた。

「麗人?」

「ああ、ソフィア・ヌアザレ・ソフィアリって言う魔術師がそう呼ばれてるんだ。かなり優秀な魔術師だよ」

「なるほど。では向かっている先のもう一人、バルトメロイと比べるとどうなのですか?」

慎二郎は顔を歪めて答える。

「……比較にならないよ。ソフィアリは名門だけどバルトメロイは格が違う。魔術師だけの力比べならほとんど誰も勝てやしないさ」

二人は駆ける。二つほど道をまたぐ。そして

「鬼が出るか蛇が出るか……行こうセイバー！」

「ええ、マスター」

二人は戦場へ飛び込んだ。

そこで二人は目にした。

「へっ？」

右半身のとろけ飛んだ巨体の槍使い。ランサーの姿を。

「あ、あれ？書類に書いてあった……ランサーだよな。あれ。し、死んでるのか？」

慎二郎が事態を把握出来ずにいると巨体の影から人影が出てきた。

「あら、金魚のフンですわね。今日は一人ですね？」

紅に身を包んだ麗人が優雅に現れた。

「へー、そいつもマスターなのかい？冴えないね」

慎二郎は身構える。こちらは明らかにサーヴァントであり、尋常ならざる気配を纏っていたからである。慎二郎は喉を鳴らした。

「下がれ下朗！私を誰だと思っている！」

セイバーが吠える。何が気に障ったのか身体を小刻みに震わして睨みつけていた。

「っ！？な、何故貴方が……ん？」

黒騎士がたじろぐ。しかし横目ではしっかりセイバーを確認していた。その様はまるで叱られている子供のようである。ふと黒騎士が頭のある部分に注目した。

「……ない。ないじゃないか！触覚が生えてない！あの人じゃないじゃないか！よくも……僕を騙したな」

ギロリ。黒騎士がセイバーを睨みつける。セイバーの身体が揺れた。

「……ふーん、へー。なるほどね。マスターこいつらは」

「麗人！」

慎二郎が咄嗟に麗人を抱いてその『場』を脱出した。その『場』に超高濃度の魔力が炸裂する。魔力、そうそれは慎二郎、そして麗

人も良く知る魔術

「ほう、良く避けたな有象無象。俺のガンダ撃ちに反応するとは中々いいセンスをしている。名乗れ」

尊大な態度で現れた男は慎二郎を高所から見下ろしていた。まさにバルトメロイの名を冠す者。慎二郎は身震いした。

「て、敵に名を明かすやつがいるわけないでしょう!」

慎二郎は精一杯の強がりをした。勝てない。本能がそう言っていたのだ。

「敵? くははははは。俺の敵に貴様が成れると言うのか? これは傑作だ。ここ十年で一番笑える冗談だな……身の程をわきまえよ有象無象!」

慎二郎は震えが止まらなかった。格の違いを改めて実感してしまったのである。

震える慎二郎はふと抱きとめている女性を見た。麗人と呼ばれている魔術師ですら怯えた目でバルトメロイと言う怪物を眺めていたのだ。

慎二郎は絶望した。

(バルトメロイを止める? 倒す? 冗談じゃない……無理に決まっている。俺なんかじゃ)

ふわり。慎二郎の肩に甲冑を纏った硬質な手が置かれた。それはひんやりと冷たく、そして

「……熱い」

慎二郎の目に生気が宿る。身体が、心が燃え始める。

「忘れるなマスター。貴方には私がついている。私は負けない。ならば味方である貴方がどうして負けることがありましようか。私と共に戦いましょう」

セイバーがキツと高所のバルトメロイを睨みつける。

「つまらぬ小細工を弄す有象無象よ。我が神の前にはそんなものは通じぬと知れ!」

激昂するセイバーを眺めてバルトメロイは齒噛みした。

「恐怖、畏怖の感情を植え付ける暗示……初歩の初歩ですわね。わたくしとしたことが……というより……い、いつまで触っていますの！」

麗人は慎二郎の手を払いバルトメロイを睨みつける。心なしか顔も髪と同じ色をしていたが慎二郎は気付かなかった。何より怒った麗人がどれほどの脅威かは時計塔生活で身に試みていたので気づいても恐ろしくて何も言えなかっただろう。

「折角この俺が情けをかけてやったと言うのに……どうやら俺に挑んで塵一つ残らぬ方を選ぶようだな」

慎二郎はセイバーを見る。セイバーは視線を合わせて頷く。二人の心は今間違いない繋がった。打倒バルトメロイ。二人は同時に口を開いた。

「俺は大勢を巻き込む貴方を認められない」

「ゆえに我らは貴公を打倒する」

「今さら何を言っても貴方には通じないでしょう」

「だから」

二人は同時に

「行け！セイバー！」「突撃い！」

指を差した。

「へっ？」

慎二郎はあわててセイバーに向き直る。

「せ、セイバー？あのお……なんで敵に向かわないのでしょうか？」

セイバーは当たり前のように言った。

「私は指揮官であり、乙女です。私が先陣を切れるわけがないでしょう。ささマスター突撃ですよ。私も旗持ちとして共にありますゆえ」

慎二郎は絶望した。

高み

慎二郎は絶望した。

「あー……やっぱりね」

黒騎士がいくぶんか嘲笑を孕んだ声で語る。

「さつきセイバーのやつ俺に睨まれて震えていたろ？まあ声をかける時もだけど。びびってたんだろ？自分が弱いからさあ。要するに自分一人じゃ何もできない……欠陥英霊ってやつさ」

黒騎士が嗤う。

「あははははは。僕以外にもこんな屑がいたなんて笑えるよねえ……英霊って言うからには大事を為したんだろ？くはっ。よっぽど周りが優秀だったんだねえ」

セイバーは悲しそうな顔をして振り返った。

「ええ、そうです。私の愛する者たちは私たちの故国のために必死に戦い抜きました。ただの少女を信頼して命を賭けてくれたのです……それは、それは私の功績ではなく、彼らの功績といふべきでしょう。彼らこそが救国の英雄だったのです。そして私はその彼らを率いていただけ。私が英雄などどうして言えましょう。私は……ただの乙女でしかなかったのだから」

セイバーは意気消沈して肩を落とす。

「私にも貴方がたのような力があれば良かったのですが……」
顔は見えないものの黒騎士は露骨に嫌悪した雰囲気です。セイバーを見る。

「ちっ、所詮似てるだけかよ……まあいいさ。サーヴァントのいないマスターなんて僕一人で十二分だからね」

黒騎士はフルフェイスの兜をバルトメロイに向ける。

「さあ覚悟はいいかい。ランサーのマスター。大言叩いてくれたけど所詮一人の人間だっことを思い出させてあげるよ」

黒騎士が今にも飛び出そうと溜めを作る。

バルトメロイが口を開いた。

「待つがいい、バーサーカー」

黒騎士、つまりバーサーカーがその姿をあざ笑う。

「命乞いかい？ランサーのマスター。くく、見苦しいのは嫌いじゃないぜ」

バルトメロイが驚嘆した顔をしてバーサーカーを見下ろす。

「命乞い？この俺が……ふむそれも含めて教えてやろう。貴様らは二つ勘違いをしている。まず一つ……ランサーは不死身だ」

その場にいる全員がランサーの死んでいた場所を見る。

「い、いない!？」

慎二郎が叫んだ。その場の全員がランサーの姿を探す。

バルトメロイの背後から巨漢の槍使いが姿を現した。無傷である。

> i 3 5 6 3 4 — 4 2 3 7 <

「ばつ、馬鹿な！殺傷回数みたいな制限付きの不死身じゃないつてのよ？『あれ』を使ったのに……あれだけ殺したのに死なないつてのよか!？」

バルトメロイが武骨な石を取りだした。

「二つ！この俺が貴様ら使い魔風情に劣るといふ極大な勘違いだ！武骨な石が振動し始める。」

「裂け、割け、咲け、反転し反射せよ、月より穿て、月光!」

武骨な石が白銀に輝き、一筋の光が零れおちる。光はバーサーカーの胸を一瞬で通過し消えた。バーサーカーが崩れ落ちる。

「がはっ！なんだ、これは。まさか魔術だったのか？一応そこそこ魔力耐性はある方なんだけど……ね」

膝をついたバーサーカーをバルトメロイが見下ろす。

「くだらん余興だ……ランサー、手を出すな。俺が直々に手を下す。光栄に思えよ。有象無象!」

バルトメロイは水晶を取りだし、一言つぶやいてそれを砕き、投げ捨てた。

夜空にきらきらと碎片が舞い踊る。

「爛乱」

一言、その一言だけで美しく、そして恐ろしいバルトメロイの魔術が完成した。

光が乱反射してあらゆる方向に照射される。

光が麗人、ソフィアの足を通過する。

「っ！」

ソフィアが地面に倒れ込んだ。光が通過した場所はまるで名刀を携える剣豪の一太刀。傷一つつかずに……肉と骨を断っていた。

さらに光が倒れ込むソフィアの額に向かって反射した。

バーサーカーは先ほどの傷で動けず、ソフィアも動けなかった。

「あっ」「マスタアアアア！」

無情にも光は寸分たがわずソフィアに向かっていく。

ソフィアに防ぐすべはなく、バーサーカーは動けない。ゆえに必死。ソフィアは目をつむった。

（無念ですわ……ソフィアリの力を見せつけることもなく散ってゆく、我が身の不甲斐なさ……せめてほんの少し、ほんの少し時間があれば防ぐ手立てはあったものを……全ては手遅れですわ。すみませんわね遠坂朱音。約束守れそうにないですわ。父上、母上申し訳ございません。不甲斐ないわたくしをお許しください……はて、妙ですわね。結構時間経ちましたわよ？）

ソフィアが目を開けるとそこには一人の少年がいた。天然であるうパーマがかかった黒髪、細身で小柄な体躯（日本では平均）、つまり

「間桐……慎二郎？」

> i 3 5 6 3 5 — 4 2 3 7 <

慎二郎は振り向いて叫んだ。

「どうにか出来ないか？麗人！こっちもそう長く持ちそうにないっ！」

慎二郎の両手には短めの刀が握られていた。光が降り注ぐ。ソフィアは目を閉じようとすがその瞬間……慎二郎が光を切った。そ

れも連続で。その動きは人間の動きを逸脱しているようにソフィアには見えた。

「れ、麗人！はあ……くはっ……何か手はないか？割と……限界だ」
ソフィアははっとして豊かな懐から小瓶を取り出す。二、三言つぶやいて小瓶の中身をぶちまけた。それは空気に触れると徐々に凍りついていく。さらにソフィアが詠唱を開始するとそれは形を変化させ、かつ膨らんだ。それは小さなかまくらのような形にまで変化する。

「こっちですわ！」

ソフィアと慎二郎はその中にもぐり込む。

「はっ……はっ……だ、大丈夫なのかこれ？」

ソフィアは胸を張って答える。

「当然ですわ！『あれ』が光である以上このソフィアリ城を突破することはできませんもの」

「ソフィアリ……城？」

慎二郎が怪訝な顔をして周りを見る。二人入るのが限界なこの氷のかまくらはどうみても城とは言えなかった。ソフィアは顔を真っ赤にして叫んだ。

「う、うるさいですわね！先ほどランサーを仕留める際、少々魔力を消費し過ぎましたの。そうじゃなければこれは巨大な城になる……

…予定だったんですわ！」

とりあえず二人は一息ついた。

ソフィアが口を開く。

「ところで先ほどはどうやったんですの？光を切るなんて聞いたことがありませんわ」

「あ……まあ言ってしまうえばあれって光である前に魔術なんだよ。魔術で統御しているものだからそれを切断してしまえばあとはただの光さ」

ソフィアは頬を膨らまして憤慨する。

「そんなもの言われずとも知ってますわ！問題はそれをどうやって

切断したかでしょうに」

慎二郎は苦笑して

「そこがこの礼装の秘密なんだけど……まあいいか。これは切断しているように見えて、実は切断していないんだ」

「どういうことですか？」

「統御している術式自体を吸収するのがこの双翅フタハネの真骨頂なのさ。

そこさえどうにかしてしまえばあとはただの自然現象だからね。吸収が間桐の特性なのは……知らないか。まあその特性を強化、補助してくれるのが礼装刀双翅の機能なんだ。一応、一工程から三工程くらいの魔術には対応できるはずだよ……理論上はね」

ソフィアは感心して慎二郎を眺めていた。遠坂朱音の金魚のふん程度にしは見えていなかった慎二郎に彼女は今宵二度も命を救われている。ソフィアの中に慎二郎という存在が大きくなっていった。それゆえに

「では質問を変えますわ……何故わたくしを助けたんですの？」

慎二郎は虚を突かれたようにソフィアを見る。

「わたくしたちは明確な敵同士ですわよね。聖杯を巡る戦いの中、わたくしという敵を救ったことにいったいどんな意味がありますの？」

ソフィアは慎二郎を見る。明らかに何も考えずに動いていたであろう慎二郎を見てソフィアの胸には色々な思いが渦巻いていた。それもまたソフィアを苛立たせる。

「非合理的ですわね。敵を助けるなど……答えなさい！」

慎二郎は動揺しながらもはつと顔を輝かせて答える。

「あ……あれだバルトメロイを一人で倒すのが無理だろうから、君に恩を売って……そう、共闘出来ないかなって考えたんだ」

一応筋道立った答えであったが、明らかに本心でないところがソフィアをさらに苛立たせた。

（この男は……この男は……この男は……この男は！）

「……まあいいですわ。その誘い、乗って差し上げますわ。まずは

この窮地を脱する手を考えますわよ」

「ああ！」

慎二郎は顔を輝かせて答えた。それもまたソフィアを苛立たせる。その苛立ちを形容する言葉をソフィアは知らなかった。

光が交差する戦場より2、3kmほど先の高台に二つの影があった。

一つが語る。

「そろそろ行くわよ……アーチャー」

二つの影が動き出した。

「いやー上手く凌がれましたねえ、マスターどの」

ランサーは笑みを深めて不格好な氷のかまくらを見る。

「ふん、あの氷……鏡になっているわけか、流石ソフィアリと言ったところだな」

バルトメロイが半ば感心するように言った。

「その前の坊主も中々見事な剣捌きだったですがねー。あの坊主割と『こつち』側かもしれませんなー」

ランサーが今にも飛び出しそうなほど前のめりになる。バルトメロイは眼下にある別の異変に気付いた。

「ランサー……前言撤回だ。あそこに隠れているマスターを仕留める」

ランサーはぐるんと振り向き、口角を上げ、答える。

「あいあいさア！」

ランサーが動き出した。

（やっぱり魔術師から見るとあの光景は怖いのかねー……まー俺は興味ねーけど、それよりあの坊主……『いい』ねえ！）

慎二郎とソフィアは二人同時に別の気配を感じ取った。

「来る！」「来ますわ！」

ソフィアは爪を噛んで顔を歪める。

「今は会いたくないですわ……このような無様な姿をみせ」

慎二郎は血相を変えてソフィアに振り向き、叫んだ。

「何を言ってるんだ君は！ちい、伏せろ！」

ソフィアの頭を押さえて慎二郎は地面に伏せ、自らの腰に手を回した。

「何をするんですの!？」

ソフィアは抑えつけられている隙間から抗議の視線を慎二郎に向

けた。ソフィアは息をのむ。その顔は今まで見たどの人間よりも冷たく、冷徹にソフィアには思えた。

「来るなら……来い」

「そーれえい！」

ランサーが氷のかまくらに槍を突き入れる。数多の光を阻んだ城がもろくも崩れ去る。しかし穂先は空を切っていた。

「ひゅ！」

ランサーの足元から影が飛び出す。銀の光が二閃またたく。ランサーは寸前で槍を戻して足元への攻撃を防いだ。

「おいおい！随分……ってどこ行った？」

ランサーの足元を潜って、死角に回り込んだ影はそのままの勢いで首にめがけて銀閃を放った。

「がぎい！」

「くっはー、面白いなー坊主。速くないけどすばしっこい。力はないけど変則的。おもしれー動きだ。人間の割に強い！でも一つ疑問があるんだぜ？なんで勝てると思ったのよ？」

ランサーが『軽い』力を槍に加えた。罅迫っていた『慎二郎』はたやすく吹き飛んでしまう。ランサーはゆったりと慎二郎に向き直った。

「そんだけの力があれば、どう逆立ちしたって勝てないことくらい理解できるだろう？どうして逃げねーんだ？どうして『まだ』立ち向かう？」

飛ばされた慎二郎は足を震わせながら立ち上がった。目は真っ直ぐにランサーを見据え、刀を構える。一步前へ。

「お前たちが大勢を巻き込んだからだ」

ランサーは笑って

「でも死ぬぜ？強者が弱者に駆逐されんのは世の常だ……強がるなよ、坊主」

慎二郎も自らを嘲笑う

「そういうものに納得できないから……俺はここにいるんだ」

慎二郎は腰を落とす。無駄だとわかっていても前に進む。

「きつとあんたは強いから……わからないんだろっね」

さらに前へ

> i36045—4237<

ランサーは目を剥いた。その言葉が、姿勢がランサーにどのような感情を与えたかはわからない。ただランサーは笑みを浮かべて槍を構えた。

「くく、いいなあ坊主は自分の思うままに生きられて……羨ましいなあ…… かつこいいなあ…… だからさあ……… 死ぬ」

ランサーの身体から濃密な殺気が噴き出して、慎二郎を捉えた。

『垂れ流す死の槍』

ランズオブアキレウス

開放された宝具が重ねたであろう死の数を感じて慎二郎は唾を飲み込む。ランサーが表情を消して言う。

「かつこいいぜ正義の味方……その正義を抱いて溺れ死ぬ」

ランサーが飛び出した。

二つの影は夜の冬木を疾走していた。

「ところでアーチャー、肩甲骨の間とかかと、同時に射れるかしら？」

アーチャーと呼ばれた男は眉一つ動かさず先の戦場を眺める。

「難しくはありませんが、マイマスター。宝具の使用を許可願います」

マスターと呼ばれた者はこくりとうなづいた。

「それでは……ほぼ『同時』になるように放ちます。ご武運を、マイマスター」

アーチャーが弓を取り出し二本矢をつがえる。夜空に向かって弓を引く。

「さあ、仕留めてくれよ」

『フェイルソート
必中無駄なしの弓』

> i 3 6 0 4 6 — 4 2 3 7 <

夜空に二本の矢が放たれた。

「さて、あとはマイマスター次第か」

アーチャーの隣からマスターが消えていた。

「溺れ死ねえ！」

ランサーが飛び出した瞬間、夜空から二筋の流星が降り注いだ。

一つは肩甲骨の間を穿ち。

もう一つはかかとを射ぬき……かけた。

「いてーなおい」

ランサーは肩甲骨の間から胸まで突き抜けた矢を抜き取る。そして矢が来た方向に顔を向けた。

「あいさつもなしにひでーじゃねえか。矢つてことは弓兵かあ？」
バルトメロイが立っていた方向とは逆の高所にアーチャーは立っていた。黒髪、中肉中背、そして何よりも騎士であった。

「それは失礼したな。ランサーよ。確かに私はアーチャーだ。それよりも驚いたぞ。ほとんどタイムラグがないよう放ったはずだったのに、貴公はかかとの矢をはたき落したのだから……何故反応できたのか、差支えなければ教えていただけないだろうか」

ランサーは何故か憎らしげにアーチャーの顔を眺めて言う。

「あん？簡単だろーが。背中にささった時に気を張ったら、かかとも来ていたから迎撃しただけだ」

アーチャーは呆れた顔をしてランサーを見下ろす。

「刹那の間でそれほど動けるなら、恐ろしい相手……だったよ」
「あん？」

アーチャーは表情一つ変えず端的に事実を告げた。

「もう貴公のマスターは終わったぞ」

ランサーは己の主がいるはずの場所を見て、愕然とした。

千呪の魔眼

慎二郎は腰が抜けたように座り込んだ。眼前には唾然としているランサー、その奥には深紅の着物を纏った黒髪の女性と巨大な赤い石のようなものが立っていた。

そこはバルトメロイの立っていた場所であった。

「遅いじゃないか……朱音」

> i 3 6 4 9 2 — 4 2 3 7 <

慎二郎が心底ほつとした声で語りかける。朱音と呼ばれた女性は優雅に振り向き、整った顔に笑顔を浮かべながら

「うるさい馬鹿慎二郎」

こう言った。

慎二郎は苦笑いを浮かべて遠坂朱音を見る。ソフィアほどの派手さはないが日本人から見れば十分目立つその美貌、そしてそれを引き立たせる誇りと尊さ、常に優雅たれという遠坂家の家訓を体現している。

しかし

「サーヴァントに生身で立ち向かうなんて正気の沙汰じゃないわ！ふざけてるの？死にたいの？むしろ死になさい馬鹿慎二郎！」

今はその全てが台無しになっていた。

「あ、あはは……ごめん」

憤怒の朱音に苦笑いで謝ると

「誠意が足りない！」

ガンドが飛んできた。全力で回避する慎二郎。諤々震えるその様は先ほどランサーに立ち向かった男とは思えないほど無様であった。

「この魔術は……どうなっているんですの？」

朱音はソフィアの方に振り向いてにやりと晒った。

「あーら、誰かと思えば単身バルトメロイに挑んで勝ったと思って余裕ぶっこいてたら死にかけたソフィア家の方ね。おほほ」

ソフィアはガリつと爪を噛む。

「ぐぬう……いい、言い訳はしませんわ」

それを見て意外そうに朱音はソフィアを見た。そして木の陰に隠れて訝々震える慎二郎を見ると息を吐いて朱音は語り始めた。

「まあいいわ。とりあえず私の作戦はこの秘術をどうやってバルトメロイに当てるかってところがミソだったのよ」

木の陰から慎二郎がひよこつと顔を出す。

「そのために作戦を綿密に練っていたんだけど……どこかの誰かさんがいきなり突っ込んで台無し、急遽その場で作戦を急造したわけ。段取りはこう。私のサーヴァントがランサーを引き付ける。私がバルトメロイを討つ。はい完璧」

ソフィアが露骨にがっかりした顔で朱音を見る。

「……言つとくけどもつと優雅でインテリジェンス溢れる作戦があったのに貴女のせいでおじやんになったんだからね。まあいい囲にはなったけど。それとこの赤い石の正体は」

慎二郎とソフィアがごくりと喉を鳴らす。

「内緒」

「……つておい！」

> i 3 6 4 9 3 — 4 2 3 7 <

慎二郎、ソフィア、ランサーが声を合わせてツッコんだ。

「つておいつて……あたりまえでしょう？どこの世界に自分の秘術をベラベラしゃべる魔術師がいるつてのよ」

慎二郎が顔を伏せる。

「まあ詳細は話せないけどとりあえずこれで仕留めたことは間違いないわ」

慎二郎が顔を上げて問う。

「確証はあるのか？」

朱音は慎二郎を見て自信満々に胸を張る。慎二郎はそれを見て無意識にソフィアの胸をちらりと横目で見る。悲しいほどそこには人種の壁が横たわっていた。

「手も足も動かせず、しゃべることも出来ない状態で焼かれてるのよ？ 魔術師に何が出来るってのよ」

慎二郎たちは得心がいった。確かに手足、詠唱を封じられた魔術師など翼をもがれた鳥と同じようなもの。勝負はついた。慎二郎はランサーを見る。

「助けに行かないのか？」

ランサーは振り向いて無表情で答えた。

「命令されてねーからなあ。これで俺の聖杯戦争は終わりか……つまんねー。結局結末がつまんねーのは前と一緒かよ」

ランサーは膝をつく

「だっせえ」

ランサーは天を仰いで自嘲した。

「慎二郎！」

慎二郎は聞きなれない呼び声に一瞬戸惑い振り向く。そこには切羽詰まった顔のセイバーがいた。

「セイバー無事だったのか！あの光の中よく」

慎二郎の言葉を遮りセイバーが慎二郎の肩を引つ張る。

「そんなことはどうでもよいことです。それよりもこの場から一秒でも早く離脱しましょう」

セイバーは慎二郎を引つ張ろうと力を入れる。その力のあまりの弱さに慎二郎は苦笑せざるを得なかった。

「いいんだよセイバー。もう終わってたんだ。俺たちの戦いは」

優しく慎二郎はセイバーを諭すが、セイバーは聞く耳を持たなかった。慎二郎は困惑する。その時、慎二郎を貧弱な力で引つ張り続けるセイバーが信じられないことを言った。

「まだ終わっていません！『あれ』から離れましょう。『あれ』は人じゃない。いったん離脱するのです慎二郎！我々では『あれ』に抗し得ることはできません」

慎二郎の困惑はさらに深まる。

「何を言ってるんだセイバー。あれは遠坂朱音の魔術だから心配することはないよ。たぶんもうこの聖杯戦争の間は弾切れだろうからね」

慎二郎は横目で朱音を見ると朱音はふんと鼻を鳴らした。

「そっちではありません！『あれ』はあの石の中身です！」

「えっ？」

慎二郎が振り向くと石には小さなヒビが入っていた。それは徐々に大きくなり、そこから得体のしれない何かがどろりと零れ出した。

「逃げるぜマスター」

バーサーカーがソフィアを担ぎ、場を離脱する。

「な、何するんですの!？」

「離脱するんだよ。あの女がそう言うんだ……たぶんやばいからね」
ソフィアが困惑した顔でバーサーカーを見る。

「あの女？」

バーサーカーは吐き捨てるように答えた。

「聖女さ」

「マイマスター……これは」

朱音は唇を噛んで悔しそうに答えた。

「うっかりしていたわ。バルトメロイには『あれ』があつたわね……引くわよアーチャー」

石に一際大きな亀裂が走った。慎二郎は信じられない思いでそれを見上げる。セイバーが甲冑を纏った拳で慎二郎を殴った。

「退却です。慎二郎！貴方はここで死んでよい人間ではありません！」

殴られた頬をさすり慎二郎は頭を冷やす。セイバーと共にその場を離脱しようとする、石にさらに大きなヒビが入った。溢れる。

「よくも……よくも俺にこれを使わせたな……許さん……絶対に許

再度集う

「誤算だったわ……まさかバルトメロイの魔眼がこれほどは」

遠坂朱音は自身のサーヴァントアーチャーと並走していた。魔眼の有効範囲から外れるためである。

「面妖な……いかなる秘術を用いればこのような禍々しい現象を生み出せるのか」

一目見て歴戦の騎士であるアーチャーをもつてしてもこの状況は規格外であった。

「そもそもこれは人の業なのか？」

アーチャーは飛散してくる呪いを見る。それは万物を犯し、万物を喰らい、万物を呪っていた。

「人ならざるから魔術師、魔術師ならざるからバルトメロイなのですわ」

並走する二人に合流する形でソフィアとバーサーカーが現れた。

バーサーカーとアーチャーは一目お互いを見て、視線を逸らした。

「ってなんで私は貴女と走ってるのよ！」

朱音は顔を真っ赤にして叫ぶ。ソフィアはにやりと暗い笑顔を浮かべた。

「あーら、派手に登場して、カツコよく決めたはいいが結局被害を拡大させただけの遠坂さん家の朱音さまですわね。おほほほほ」

朱音は唇を噛んでソフィアを睨みつける。

「だからなんであんだがここにいるのかって聞いてんのよ！」

朱音とソフィアは睨みあい一触即発の状況となった。ソフィアは懐から、朱音は袖の下から何かを取り出そうと動く。その瞬間

「そんなことしてる場合じゃないだろう！二人とも！」

間桐慎二郎とセイバー組も遅れて合流した。慎二郎はキツと二人を睨む。

「単身じゃどうしようもないからこうやって集まったんだろ？じゃ

なけりや敵同士が仲良く並走なんてありえないさ。だからこそ今はもっと生産的な話をするべきじゃないのか！このままじゃ聖杯戦争どころか冬木そのものが人の住めない土地になるんだぞ！」

睨まれた二人はしゅんと肩を落とす。その光景を見てバーサーカ―はくつくくと笑った。

「その通りだね。僕らの共通の敵は決まっている。あの化物さ。でもどうする？バルトメロイを倒したらこの呪いは解けるのかい？それとも持続する？あはは、それ以前に呪いの中心にいるであろうバルトメロイにどうやって近づくんない？」

バーサーカーはからかいの口調であったが現状を的確に分析していた。実際問題、バルトメロイが際限なく呪いを振りまいている限り、人間は近寄ることすらできない。そして呪いの解呪方法もわかっていない。つまり現状どうしようもないのだ。三人の魔術師は眉間にしわを寄せる。その時今まで黙っていたセイバーが口を開いた。「ふむ、よくわからぬが近づくだけなら容易いぞ」

その場にいる全員が一斉に振り向いた。バーサーカーだけが何か知る様な雰囲気を出していた。

「どうということなんだセイバー？」

慎二郎が問うとセイバーは胸を張って答えた。

「私は呪いにはかからんだ！」

その場の全員がぼかーんとなった。セイバーは反応悪しと見たか、その場に飛散してきた呪いをひつつかみ振り回す。

> i 3 7 0 2 5 — 4 2 3 7 <

「どうだ慎二郎！」

どこか得意そうなセイバーを見て慎二郎はどういう表情をしたらいいのかわからなかった。一つだけ言えるのは

「ちょ、そんなもの振り回してんじゃないわよ！飛び散るじゃない！」

遠坂朱音が皆を代表して言った。セイバーはしょんぼりして肩を落とす。

「だが、その少女が呪いを受けないことの証明は出来ましたな」
アーチャーは言った。しかしソフィアが口をはさむ。

「たとえ近づけたとしても、戦闘力のない英霊に何が出来ますの？」
セイバーのしょんぼりの度合いが増した。全員が考え込む。いや、
バーサーカー以外。アーチャーはバーサーカーを睨む。

「なぜ貴様はにやついている……モードレット」

バーサーカーはへらへらとアーチャーに向き直った。

「そりゃないぜサー・トリスタン。真名を人前ではらさないでほしいねえ。あー、何故って？そりゃ決まってるだろ？どうしようもないことに深刻になっても仕方ないじゃないか」

「貴様っ！」

アーチャーはバーサーカーに弓を向ける。

「実際そうだろ？僕たちに何が出来るって言うんだい？何もできないさ」

バーサーカーも槍を取り出して応じる。

「貴様がロンに触れるな！篡奪者、裏切り者のモードレットよ！」

バーサーカーは素知らぬ顔で槍をなでまわして見せた。

「これはもう僕のさ。我らが騎士王のものじゃない。っていうかあんたに裏切り者なんて言われる筋合いはないよ。裏切り者の親友だろ？あんた」

アーチャーの目が見開かれた。右手にはいつの間にか矢が用意されていた。弦を引き絞る。

「貴様に、貴様にあいつの何がわかる！」

バーサーカーも腰を落とす。

「それもこっちのセリフ。あんたに僕の何がわかるってんだよ」

二人の殺気が極限に高まった。その瞬間

「令呪によって命じる」

「くだらん争いをやめよ！」

二人を強制する輝きが、朱音とソフィアの手から発していた。

「ちえ」「ぬう」

二人の騎士はお互い矛を収めた。ただし警戒は解かない。その様子を見てほっとした慎二郎はふと冬木の空を見る。

「あつ……止んでる」

先ほどまで降り注いでいた呪いが今は止んでいた。それは

「際限なく使えるわけじゃないのか、それとも別の理由か……まあよくわかんないけどとにかくチャンスだ！生かさないと手はないね」

バーサーカーとソフィアが駆けだそうとする。その時道の先から不死身の槍使いが現れた。

「よう。とりあえず第二ラウンド……スタートってね！」

駿足のランサーが突貫してきた。その背後には

「覚悟は出来たか有象無象」

> i 3 7 0 2 6 — 4 2 3 7 <

最強の魔術師が牙を剥いた。

バルトメロイ

「……ランサー……いるのか？」

呪詛の海の中心に最強の魔術師が臥していた。そのきつちり閉じられた目蓋からは涙のように呪いが流れ出て、地面を濡らしている。ランサーが呪いに触れぬよう慎重に主の元に近寄った。

「ここにいますよー。てーかこんな奥の手があるなら先に言っといて欲しかったですわ。なんか赤っ恥かいましたぜ」

目蓋を閉じたままバルトメロイがランサーのいる方向に向く。

「奥の手？これがか？ふざけるな。こんなものが俺の、バルトメロイの奥の手であるはずがない！あつてはならない！」

バルトメロイは憎らしげに顔を歪ませた。ランサーは首をかしげる。

「でもマスターの能力でしょう？魔眼つてやつじゃないんですかい？」

バルトメロイはランサーから視線をそらし、天を見上げた。

「確かにこの『千呪の魔眼』は俺の、バルトメロイの持つ魔眼だ。威力は貴様も今目にしている通り絶大にして不可避、まあ最高クラスの魔眼だと言える。だが俺たちバルトメロイからしてみればこのようなもの呪い以外の何物でもない！己れで御しきれぬ力をどうして己が力と言える？俺の力だと胸を張って言える？言えるわけがない！」

バルトメロイは一気に捲し立てると、一息吐いてランサーに向き直る。

「これは呪いだ。バルトメロイに生まれたもの全てに降りかかる……な。バルトメロイが世に、この場合魔術の世界だが、出る時にはすでに完成された魔術師になっているのが慣例となっている……が……まあ何のことはない、この目のせいで出るに出れぬだけのこと。曲がりなりにも俺のように普段抑えが出来て初めてバルトメロイと

して一人前、そしてその頃には時代最高クラスの魔術師になっているという寸法だ。皮肉だろう？この忌まわしい目を抑えるための魔術が自己の証明となっているのだからな。だからこそ俺たちはこの目を忌み嫌い、その感情すらも魔術の研鑽に当てるのだ。いずれこの目を越え、真の意味で貴き魔術師になるその日までな」

バルトメロイが目を開ける。そこには闇はなく、ただ曇りなき眼がそこにあつた。

「無駄口が過ぎたな。ランサー、奴らを追うぞ」

ランサーが立ち上がる。ランサーの目の前には最強の魔術師がそこにいた。ランサーは天を仰いで笑う。その目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「どうした？何かおかしなことを俺は言ったか？」

ランサーは目の端に浮かぶ涙を手の甲で拭きとりにやりと笑う。

「いーえいえ。おかしなところなんてございませんとも。ただ一つ疑問があるとすれば何故追うのだったとこですかね。迎え撃つ方が楽なのに……ってまー察しはつきますがね」

バルトメロイは中空に身を躍らせる。そしてランサーには振り向かず答えた。

「愚問だな。楽と言うのは俺に有利、奴らに不利ということだ。つまり決着に疑問の余地が残る。俺は完璧主義者でな。完全証明せねば気が済まんのだ。俺の、バルトメロイの最強にケチはつけさせんさつさと終わらせるぞ。ランサー！」

ランサーも後に続く。

「あいよ。マイロード」

ランサーは思考する。その背を見て。

(俺にもようやく主運が向いてきたかな)

「なんでっ!？」

バーサーカーが吠える。呪いが晴れて、攻撃する絶好の機会。もちろん迎撃されることは重々承知していたが

「あつちから来るんだよ!？」

ランサーが問答無用で突貫する。

「いよう。大将方……俺と遊んでちょうだいな」

バーサーカーがロン、騎士王が己を貫いた槍を構える。

「あ……ぶっちゃけおまえさんはもう……飽きちゃった」

ランサーはさらにスピードを上げて、バーサーカーの後ろに回り込む。バーサーカーは反応出来ず、前を向き続ける。

「英雄として、戦士としてお前さんは欠けてるんだよ。じゃあな」
突く。必殺のタイミング。だが

「っ!？」

咄嗟にランサーは回避行動をとった。矢がランサーを追う。否、正確にはランサーのアキレス腱に向かって

「だーから弓兵は嫌いなんだって!」

飛翔する矢を槍ではたき落とす。ランサーは矢を放った弓兵、アーチャーに向き直る。

「てめーは……接近戦で殺す!」

ランサーが疾走する。アーチャーは無言で矢を連射する。その速度は互いに神速。アーチャーの矢は正確にランサーのかかとを狙って飛翔し、ランサーは全力で以って迎撃かつ前進、その様は正に一進一退であった。

「弓兵の割にやるじゃねーか。その弓で放った矢は全部必中するわけかい!まあはたき落とせば一緒だがなあ!」

アーチャーは顔色一つ変えず矢を放ち続ける。

「かつわいくねえ野郎だな!じわじわ俺が近づいてんのくらいわかってるよな?もうすぐ接近戦の時間だぜ?弓兵よお!」

ランサーが距離を詰める。アーチャーが口を開いた。

「……ランサー」

ランサーがにやりとする。

「命乞いかよ、アーチャー!聞いてやらないこともないぜ……冥土でな!」

ランサーは刹那の隙をついて一気に距離を詰めた。

「貴公は勘違いしている」

槍をたたき込む。ランサーは勝利を確信した。

「私がいつ弓兵だと言った？」

衝撃

ランサーは信じられない光景を見た。槍をいなされ、あまつさえ自分が斬られている光景を。

「確かに私はアーチャーとして召喚された。弓の宝具も持っている。だが私の本分は騎士だよ。槍兵。接近戦が不得手なわけなかるう」

アーチャーがランサーの懐に飛び込む。正確無比な連撃はランサーの肉を削っていった。

「とうより私は接近戦の方が好みだ」

剣を持ち、何度も反復したであろう型を一分のブレもなくなぞる様は武骨の一言。正確無比にして武骨。龍麗華美な剣技とは対極。それが騎士トリスタンの武であった。

「いいねえ！弓使ってる時よりよっぽど生き生きしてやがる！来いよ。アーチャー……俺を愉しませろや！」

ランサーが笑う。その時ランサーの背後から剣が伸びてきた。

「あーん？」

ランサーが回避がてら振り向くとそこには激昂したバーサーカーがいた。

「この僕に飽きたって？……舐めてんじゃねえよ！吹き飛ばせ！」
クラレント
風王宝剣』！」

烈風が場を支配する。ランサーは笑みを深めた。

「いいぜ。来いよ。騎士ども！俺を倒して見やがれ！」

三つ巴の戦いが始まる。

「覚悟は出来たか有象無象」

バルトメロイが迫る。朱音は袖の下から銃を、ソフィアは懐から小瓶を、慎二郎は腰から刀を取り出す。いずれも一級の魔術礼装。

しかし

「無駄だ」

バルトメロイが風を、炎を、水を、雷を、大地を操る。慎二郎たちは知る。バルトメロイとは何なのかを、最強とは何なのかを。

その頃セイバーは……倒壊した屋敷の隅で呪詛にまみれた少年を見つけていた。

「坊や！……大丈夫ですか？」

少年は苦しそうにのたうつ。呪詛は着実に少年を蝕んでいた。

「あつ……ぎい……いたいよお……いたいよお」

セイバーは少年を担ぐと揺らさないように走り出す。彼女は信頼する者の元へ走る。彼ならきつとなんとかしてくれる。彼女はそう信じていた。

（そして、その時は……私も共に……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8423x/>

Fate/Second

2011年12月18日11時53分発行